

ANNUAL



UAL

REW

EW



2020年度 年次報告書

2020年1月1日~12月31日

一般社団法人
バードライフ・インターナショナル東京



CONTENTS

- 代表のメッセージ 2
- 2020年の活動ハイライト 2
- 環境保全活動
- 絶滅危惧種の保護 3
- 森林と湿地の保全 5
- 渡り鳥の保護 7
- 海鳥・海洋の保全 8
- 人材育成・生計向上の支援 9
- 環境教育の推進 10
- チャリティーイベントの開催 11
- 絶滅危惧種調査・研究 12
- 広がる支援の輪 13
- 収支報告 14

代表のメッセージ

バードライフ・インターナショナル東京（以下、バードライフ東京）は2002年4月に発足し、以後18年間着実に環境保全活動を進めてきました。発足当初は渡り鳥の保護など限られた活動でしたが、森林や海洋の保全、地域の人々の暮らしの改善、環境教育、地球温暖化の防止と多様化し、活動地域も世界に広がりました。

2020年は新型コロナウイルスの感染が世界中で拡大し、社会や経済へ深刻な影響を及ぼしました。バードライフ東京では、このような中で今できること、求められていることを模索しながら活動を推進しました。オンライン・オークションを導入するなど、ニュー・ノーマルの時代ならではのITを駆使した環境課題解決に努めてまいります。



2021年1月
バードライフ・インターナショナル東京
代表

鈴江 恵子

2020年の活動ハイライト

バードライフ東京では、環境保全活動の推進を軸に企業やバードライフ・パートナー団体との協働を進めることで、2020年は16カ国において環境保全活動を展開することができました。



絶滅危惧種の保護

鳥類の約13%が絶滅の危機に瀕しています



アオキコンゴウインコの保護 —ボリビア

ボリビアの固有種であるアオキコンゴウインコはわずか300羽しか生息していません。ボリビアのパートナー団体と協働で、アオキコンゴウインコの保護活動を実施しています。

ボリビア北部のサバンナ低湿地と呼ばれる特徴的な生態系にのみ生息するアオキコンゴウインコは、開発や密猟などで数を減らし、このままでは絶滅してしまうと考えられています。バードライフ東京は、トヨタ環境活動助成プログラムの支援を受け、アルモニア協会（ボリビアのパートナー団体）と協働で2019年1月から保護活動を実施しています。2020年に実施したアオキコンゴウインコの繁殖地調査で得られたデータは、効果的な保全計画の立案や実施、地元の畜産業の共生を図るための畜産農家への普及啓発活動に生かされる予定です。

Species Conservation

絶滅危惧種保護のための車両の寄贈 —アルゼンチン、ネパール

絶滅危惧種の保護活動を促進させるため、バードライフのパートナー団体に車両を寄贈する活動を進めています。2020年は、アルゼンチンとネパールのパートナー団体に寄贈しました。

2020年で5年目となるこの活動では、トヨタ自動車株式会社の支援のもと、毎年2台の車両を2つの国のパートナー団体に寄贈しています。アベス・アルジェンティーナ（アルゼンチンのパートナー団体）に寄贈された車両は、絶滅危惧種カオグロナキジャクケイ等の保全のため、密猟の監視、鳥類モニタリング、飼育下での繁殖と野生復帰、適切な家畜管理の訓練等の活動に役立てられます。バード・コンサベーション・ネパール（ネパールのパートナー団体）に寄贈された車両は、絶滅危惧種ベンガルハゲワシ等の保全のため、放鳥や野生復帰のモニタリング、生息状況調査、普及啓発、地域・国家レベルの絶滅危惧種保全に関する政策立案支援等の活動に役立てられます。

コサンケイの保護 —ベトナム

ベトナム中西部の森にみられたキジ科のコサンケイは野生での絶滅が危惧されています。2018年より、経団連自然保護基金の支援を受け、Viet Nature（ベトナムのパートナー団体）と協働で、コサンケイの保護増殖活動を支援しています。

プロジェクトの最終年度にあたる2020年は、コサンケイの野生復帰に不可欠となる保護増殖活動に力をいれました。コサンケイの近似種であるセキショクヤケイ2ペアを譲り受け、昨年より飼育を始めました。9月に1つのペアから6羽のヒナが生まれ順調に育っています。また、将来放鳥するのに適した場所の調査も開始し、飼育センターから近い湖周辺が候補地にあがりました。このエリアには多様な生き物が生息しており、野生復帰への期待が高まっています。コサンケイの野生復帰は10年がかりのビッグプロジェクトですが、その第一段階として3年間で保護増殖センターの建設、近似種の飼育と繁殖、放鳥場所の特定と、着実な成果をあげることができました。



ネパールに寄贈された車両



セキショクヤケイのヒナが生まれました

PRISM

環境保全活動を評価するためにバードライフはPRISM ツールキット*を2017年に開発しました。実施した環境保全活動の成果や有効性を評価することで今後の活動や計画の改善を目指します。SDGsの達成に関心が高まる中、環境保全活動の見える化に貢献していきます。

*PRISMツールキット (Practical methods for evaluating the outcomes & Impacts of Small-Medium sized conservation projects)

森林と湿地の保全



年間1300万ヘクタールの森林が失われています

アフリカでの植林活動 —ブルキナファソ

森林劣化と砂漠化が深刻な問題となっている西アフリカ、ブルキナファソ北部において、地域住民と協働で植林活動を行っており、2020年には8,906本を植林しました。

ブルキナファソ北部のウルシ湖周辺は、世界で最も砂漠化が急速に進んでいる地域です。森林の復元を目指して、2011年から株式会社リコー（以下リコー）の支援を得てナチュラマ（ブルキナファソのパートナー団体）と協働で植林活動を実施しています。リコーがスポンサーをするプロゴルフトーナメントでの選手の成績や、リコー環境事業開発センター（御殿場市）への訪問者が行うエコ宣言の数などによって植林本数が決められています。2011年の開始以来、これまでに93,090本を植林しました。

マングローブの復元 —マレーシア、メキシコ

生物多様性だけでなく地域住民の生活にとっても重要なマングローブを守るため、マングローブの植林と持続可能な利用を推進する活動を実施しました。

マングローブは世界で最も速い速度で消失・劣化が進んでいる生態系の一つです。リコーの支援を受け、2011年からマレーシア自然協会（マレーシアのパートナー団体）と、2015年からプロナチュラ（メキシコのパートナー団体）と協働で、マングローブの保全活動を行っています。マレーシアでは、地域住民主導で保全に取り組む体制づくりを目指し、地域住民と共に鳥類調査や植林活動等を行ってきた10年に渡る活動を締めくくりました。メキシコでは植林活動に加え、マングローブの森での養蜂を本格化し、持続可能なマングローブ林の利用を推進しました。

テクノロジーを活用した森林保全 —インドネシア

インドネシア・スマトラ島の熱帯雨林「ハラバンの森」で、テクノロジーを用いた効率的な森林パトロールの運用を実施しています。

同地域では、パームオイル生産のためのアブラヤシ農園開発により、大規模な森林破壊が進んでいます。バードライフ東京は、ブルーン・インドネシア（インドネシアのパートナー）と協働で、約10万haの森林を守る「ハラバンの森」プロジェクトを立ち上げています。2020年は富士通株式会社の支援を受け、ハラバンでのこの活動を紹介するリーフレットの作成や、ドローンや地理情報システムを効果的にパトロール活動に活かすための人材育成を行いました。

Forest and Wetland Conservation

Tree planting activities

森林保全で地球温暖化の緩和に貢献 —インドネシア

途 上国の森林減少は地球温暖化の大きな要因です。インドネシア・スラウェシ島ゴロンタロの森林で二酸化炭素の固定・吸収量を調査しました。

熱帯雨林の減少により、森林が吸収・固定していたCO²が大気中に放出され、地球温暖化を促進させる要因として懸念されています。毎年の森林の焼失面積は日本の国土を上回る規模で、海水の温度上昇や異常気象の原因ともなっています。もちろん、森林の価値はCO²の吸収源としてだけではなく、多くの生き物に自然の恵みを提供するなど、私たちにとってなくてはならない貴重なものです。バードライフ東京はブルーン・インドネシアと協働でゴロンタロの8万haの森林が良好な状態にあるのか、どれだけのCO²を吸収しているのかを明らかにするため第三者機関に調査を依頼しました。その結果を受けて長期的に森林を保全しながら地域の人々が持続的に利用するための保全計画を策定します。



ブルキナファソで植林に参加する住民

Environmental research



2015年に植林したメキシコのマングローブ

湿地に生息する水鳥の保全 —ベトナム

東 南アジアの湿地は、渡り性水鳥の重要な生息地になっているものの、これまで十分な調査がされていない湿地が多く、また依然として違法狩猟や開発などの危機に晒されている湿地も少なくありません。

バードライフ東京では、環境省からの請負のもと、Viet Nature（ベトナムのパートナー団体）と協働で、特に調査が進んでいないベトナム北部地域の湿地において調査を行いました。2020年1月にシギ・チドリ類をはじめとする水鳥のモニタリング調査を行い、各湿地の現状、絶滅危惧種を含む鳥類の生息状況、湿地の保全状況を評価しました。また、水鳥のモニタリングを行う能力の向上を目的に、現地レンジャーを対象とした研修会を開催しました。

Waterfowl



ベトナムの湿地に飛来する水鳥

渡り鳥の保護

渡り鳥の保護のため渡りのルート上の生息地を守ります



© ikuyan Shutterstock

海鳥・海洋の保全

海鳥と漁業の共存に向けた保全活動に取り組んでいます



© Alex Dodds

渡り性水鳥とその生息地の保護 —日本

渡り鳥の重要な生息地「フライウェイ・サイト」の保護と適正な管理を進めるため、フライウェイ・ネットワークのさらなる発展につながる活動を進めています。

渡り鳥を守るためには、繁殖する場所、渡りの途中で羽を休める場所、冬を越す場所を渡り経路全体で守る必要があります。日本が参加している東アジア・オーストラリア地域フライウェイ・パートナーシップ (EAAFP) の協定のもと、渡り性水鳥の生息地を保全・管理していくことが重要です。環境省の請負のもと、EAAFP 紹介冊子の日本語版の作成や国内専門家との会議を通じて、フライウェイ・ネットワークの活用に向けた取り組みを推進しました。

北海道のフライウェイ・サイトの活動支援 —日本

渡り性水鳥保護促進のため、北海道の東アジア・オーストラリア地域フライウェイ参加地の活動を支援しています。

北海道には、9つのフライウェイ・サイトがあり、渡り性水鳥の越冬地、中継地、繁殖地としてとても重要な場所になっています。2020年はパシフィック・センチュリー・プレミアム・ディベロップメントの支援を受け、新規フライウェイ参加地となるサロベツ湿原での水鳥調査、クッチャロ湖におけるタンチョウの新たな繁殖分布調査、宮島沼における温暖化の影響を受けているガン類の渡り追跡調査の支援を実施しました。

遠洋マグロはえ縄漁における海鳥混獲の削減 —日本

はえ縄漁による海鳥混獲の削減を目指し、ステークホルダーとの意見交換や、SNSを通じた普及啓発活動を行いました。マグロはえ縄漁を管理する国際会合と、持続可能な漁業に関する話し合いにも参加しました。

海鳥が直面する深刻な問題の一つが漁業による混獲（偶発的に漁具にかかること）です。マグロはえ縄漁では、絶滅危惧種を含む多くのアホウドリ類などが犠牲になっています。2020年は、デビッド&ルシル・バックカード財団、サウスジョージア・ヘリテイジトラスト、ダーウィン・イニシアティブの支援のもと、漁業関係者、行政、サプライチェーンとの意見交換や、SNS「南半球アホウドリ物語」を通じた普及啓発活動を行いました。

海鳥と刺し網漁の共存を目指す取り組み —日本

東京大学大気海洋研究所の研究者及び葛西臨海水族園と共同で、混獲回避策の実験を行いました。北海道では混獲の現状把握に向けて、漁業者らと共同で洋上データ収集を計画中です。

刺し網漁業における混獲により、世界中で毎年推定40万羽の海鳥が命を落としています。日本国内では未だその実態が分かっておらず、現状把握などが急務です。2020年は潜水性海鳥を飼育している葛西臨海水族園において、混獲回避策の検証実験を行いました。また、多くの海鳥が繁殖する北海道羽幌町周辺においては、混獲の現状把握のための洋上データ収集に向けて、漁業者、北海道海鳥センター、研究者との共同事業を計画し始めました。

Capacity Building and Improvement of Livelihoods

人材育成・生計向上の支援

人を育て、暮らしを支えて
環境を守っています



SATO YAMA UMIプロジェクト —カンボジア、ブータン、ベトナム—

カンボジア、ブータン、ベトナムの3カ国で、環境教育用の教材開発、普及啓発活動や現地若手スタッフの育成を実施しました。2020年9月にはオンラインによる国際ワークショップを開催し、成果や課題を検討しました。

SATO YAMA UMIプロジェクトは、経団連自然保護基金の25周年記念特別基金助成事業の支援のもと、日本環境教育フォーラム、コンサベーション・インターナショナル・ジャパンとの共同プロジェクトとして、2017年に立ち上がりました。本プロジェクトでは、アジア・パシフィック地域の6カ国で、持続可能な社会の実現に向けた次世代の人材育成を実施しました。2020年は、6カ国7つの現地NGOと日本の事務局がオンライン上で初めて集まり、これまでの成果や課題から、効果的な環境教育、普及啓発活動、人材育成と広報戦略等について今後の活動に向けた有意義な議論が行われました。

環境教育の推進

環境保全活動を通して
社会課題の解決を図っています

海洋プラスチックごみ問題 —日本—

身 近な問題になりつつある海洋プラスチックごみについて、小学4年生を対象に、鳥類への影響や対策について学ぶ環境教育プログラムを実施しました。

素材科学メーカーであるダウ・ケミカル日本株式会社(以下、ダウ日本)の支援を受け、海洋プラスチックごみ問題について学ぶ全7回の環境教育プログラムを、千葉県習志野市の谷津南小学校で実施しました。2020年は、海鳥専門家の川上和人博士を講師に迎え、小笠原諸島の海鳥研究の視点からプラスチックごみによる環境問題を学んだ他、豪州プリズベン市の州立学校とのオンライン国際交流を通して、自分たちが今できる取り組みを考えました。

地域参加型リサイクルプログラム —日本—

プ ラスチック循環型社会の実現に向けて、地域と協働した清掃活動と環境教育、廃プラスチックのリサイクルプログラムを始めました。

ダウ日本と環境ソーシャルベンチャーであるテラサイクルジャパン合同会社の支援を受け、鳥をクラブのマスコットとするJクラブから構成される「Jリーグ鳥の会」と連携して、地域の清掃活動とそこで回収されたプラスチックごみのリサイクルを開始しました。プログラムの第一回として、9月に「Jリーグ鳥の会」ギラン会鳥の所属するギラヴァンツ北九州、北九州市立曾根東小学校の児童とその地域の方々と連携した曾根干潟クリーン大作戦を実施しました。児童たちに地球温暖化や海洋プラスチック問題についての環境授業を行った後、曾根干潟で清掃活動を行いました。2021年春までに全国8カ所で清掃活動を実施する予定です。回収されたプラスチックごみの一部は、テラサイクルによってごみ袋などにリサイクルされ、地域の清掃活動に活用されます。



Educational programme



環境教育プログラムを受ける小学生

Recycling programme



回収された海洋プラスチックごみ

チャリティーイベントの開催

環境への理解を深めながら、環境保全に貢献する
チャリティー晩餐会を開催しています



バードライフ東京は自然保護活動支援のため、毎年2回、東京と大阪でガラ・ディナーを主催しています。2020年は大阪スプリング・ガラを中止し、インターネット・オークションを実施。10月の東京ガラ・ディナーは密を避けるため人数を減らして開催しました。

2020年は新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、3月に予定した大阪スプリング・ガラは中止しましたが、新たな試みとしてインターネット・オークションを行い、800万円の収益金を集めることができました。また、10月のガラ・ディナーは、参加者を減らすなど様々な感染防止策をとった上で開催し、2,800万円の収益金を集めました。収益金は、BirdLife International Japan Fund for Science基金、レッドリスト支援に活用させていただきました。

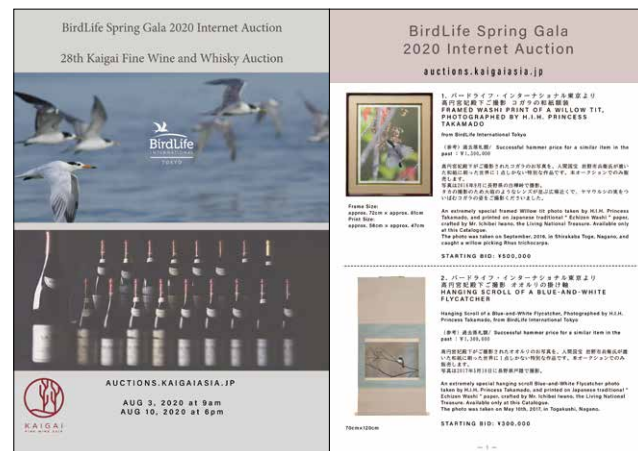
© keyshots.com

BirdLife International Japan Fund for Science 基金

バードライフの科学に基づいた
調査・研究を支援していきます



Internet Auction



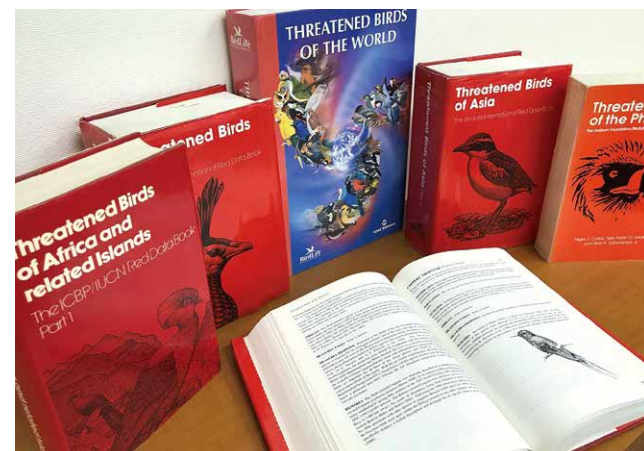
海外酒販(株)のご協力のもと、インターネット・オークションを開催

Lecture



お言葉を述べられる名誉総裁 高円宮妃久子殿下

Red Data Book



世界の絶滅危惧種を記録したRed Data Book

BirdLife International Japan Fund for Science 基金は、高円宮妃久子殿下の名誉総裁ご就任15周年を記念し2019年に設立されました。

この基金によって、バードライフが世界中で行う鳥類の保護や自然環境保護の基礎となる調査研究活動が支えられています。これらの研究は、バードライフだけでなく、様々な国際機関や政府にも基礎データとして提供され、自然保護に役立てられます。ガラ・ディナーの収益金の一部を充当した他、個人の皆様からの寄付や、ダウ・ケミカル日本株式会社、ショパールジャパン株式会社による長期的な支援をいただいています。

広がる支援の輪

理念や活動に共感する多くの方々からご支援いただきました



ソリマチグループ

1955年の創業以来、60年以上にわたって日本の会計をあらゆる形で支援してきたソリマチグループ。ペンギンをグループのイメージキャラクターにしていることから、バードライフのペンギンを始めとする環境保全活動支援のため、社内で募金活動を実施、8月に企業からの協賛金とあわせて第一回目の寄付をいただきました。今後も継続的に寄付活動を続けていただく予定です。

Yahoo!ネット募金

Yahoo!ネット募金では、バードライフ東京の支援サイトや、特定の種を保護するサイトを用意し、ご興味のあるプロジェクトへ支援をいただいています。渡り鳥である「ヘラシギ」の保護もその一つです。2020年はBANCA(バードライフのミャンマーにおけるパートナー団体)に寄付を行い、ヘラシギの飛来数の調査や生息環境の調査を地元住民が主導できるようにするための研修へ支援をいたしました。

株式会社アルテ サロン ホールディングス

海外を含め300店舗以上の美容室を展開する株式会社アルテ サロン ホールディングスより、店舗でのカラー施術の件数に応じた寄付をいただくことになりました。美容業界は大量の水を使うことに加え、染料などに含まれる化学物質が環境に負荷を与えることから自然保護への関心が高く、鳥をシンボルに自然を守るバードライフに共感して継続的な支援をいただくこととなりました。

高麗若光の会

11月に高麗若光の会の皆様より寄付を頂戴しました。会員の皆様は、高句麗から約1300年前に渡来した人々を祖先にもち、日韓の架け橋となる文化、国際交流を続けています。2018年より毎年継続的にご支援をいただいています。



法人賛助会員・個人会員

バードライフ東京には、企業や団体による法人賛助会員制度や、個人で活動を支援していただく制度があります。その他にも、絶滅危惧種の保護活動に里親として関わっていただくレア・バード・クラブ会員制度があります(50音順・敬称略)。

法人賛助会員

2020年の法人賛助会員は、以下の通りです。

- ・アルファー食品株式会社
- ・出雲大社
- ・出雲大社文化事業団
- ・株式会社アルテ サロン ホールディングス
- ・高麗若光の会
- ・高麗神社
- ・伏見稲荷大社
- ・真清田神社
- ・寒川神社
- ・北海道神宮
- ・IMHホールディングス株式会社

個人会員 (Friends of BirdLife)

個人会員制度では5,000円を1口(1年間)として寄付を募っています。個人会員の方からのご支援はプロジェクト活動費や団体の運営のために活用させていただきます。振込の他、カード決済による会員の自動継続が可能です。

その他のご支援

- ・株式会社ワンステップ
- ・スフェラーパワー株式会社
- ・大本山総持寺
- ・BLS

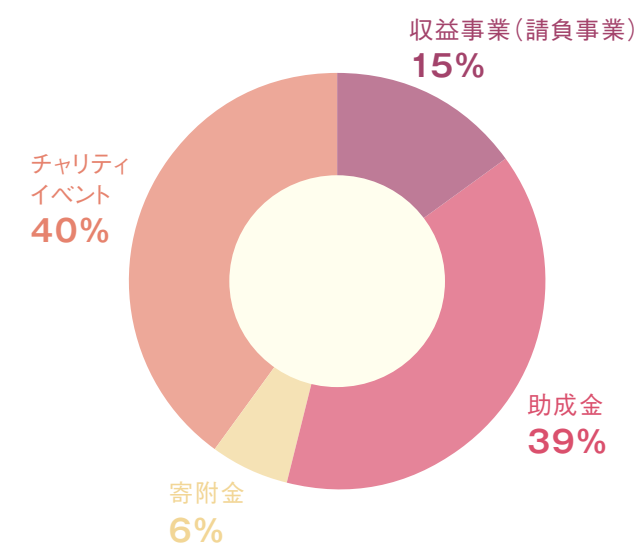
収支報告

2020年の収支報告は以下の通りです。

※2020年12月末日現在の見込(会計士監査前)

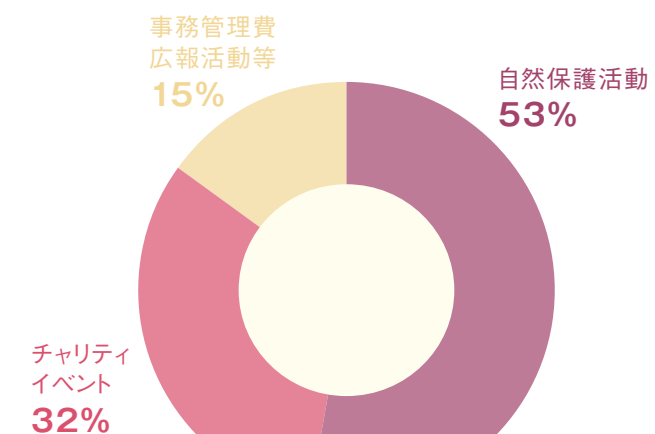
Income

収入
180,212,656円



Expenditure

支出
180,212,656円



Together we are BirdLife International Partnership for nature and people



一般社団法人

バードライフ・インターナショナル東京

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町1-13-1 ユニゾ蛸殻町北島ビル1階

TEL: 03-6206-2941 FAX: 03-6206-2942

<https://tokyo.birdlife.org>